

リーディングの指導

— 附属中学校における実践授業を通して —

大坪 喜子* 村田 潤一**

(平成15年3月14日受理)

Teaching a Reading Skill for Junior High School Students

Yoshiko OTSUBO Junichi MURATA

(Received March 14, 2003)

0. はじめに

長崎大学大学院教育学研究科では、必修科目として「実践授業研究」が設定されており、1年次の学生が附属学校で授業実践を行なうことになっている。英語教育専修の学生は例年12月に附属中学校で行なう授業実践の準備のために、「英語科教育特論Ⅰ」「英語科教育研究Ⅰ」「実践授業研究(通年)」「教材開発(通年)」(いずれも大坪担当)等の授業を通して、英語科教育の理論及び教材作成の知識を得るように仕組まれている。そして各人がそれぞれのテーマを選び、教材を作成し、授業を実践することになっている。本稿では、平成14年度に行なわれた英語教育専修生によるリーディング指導をテーマにした「実践授業」の例を紹介することにしたい。速読、または、読解力を伸ばすためのストラテジーを学習できる「ジグソー・リーディング(Jigsaw Reading)」を中心に構成されている。

以下、Ⅰでは、「第二言語としての英語教育」でしばしば取り上げられる「ストラテジー(strategies)」の概念を紹介し、速読および読解力を伸ばす指導法について触れる。Ⅱでは、附属中学校におけるリーディング指導の「実践授業研究」を紹介する。そして、Ⅲでは、その「実践授業」の意図・成果についてのコメントを述べることにする。(Ⅰ及びⅢは、大坪が担当し、Ⅱは、村田が担当する。)

Ⅰ. 英語教育におけるストラテジーの概念とは

近年、「第二言語としての英語(English as a Second Language)」の教育に関する文献には、しばしばストラテジー(strategy)という用語が見受けられる。筆者が最初に気づ

*長崎大学教育学部英語教育講座 **長崎大学大学院教育学研究科英語教育専修

いたのは、Michael Canale(1980), “A theoretical framework for communicative competence (Unpublished paper)” においてであった。この論文の中で、“Communicative Competence” は “Grammatical Competence”, “Socio-linguistic Competence”, “Discourse Competence”, “Strategic Competence” の4つの要素 (components) から成っていることが示されている。英語を「使うことば」として教えてこなかった日本の英語教育においては、この中の “Grammatical Competence” だけを教えていたことを改めて認識させられた。英語を伝達手段として使うためには、文法知識だけでは不十分であり、会話の相手や場面に応じて、適切な (appropriate) ことばであるかどうかを判断するための社会言語学的 (socio-linguistic) 知識、談話 (discourse) の流れや前後関係を理解できる能力、また、伝えたいことばがうまく出てこない時には、他の知っていることばで言い替えたりすることが求められる。

ストラテジーの概念に戻ると、ここで提示された “Strategic Competence” とは、会話の途中で、例えば、“train station” という語を知らなかったとすると、“the place where trains go” とか “the place for trains” というように、すでに知っている他のことばを用いて、コミュニケーションを成功させることができる能力を指している。言い換えれば、ストラテジーは、そのように機転を利かせてコミュニケーションをする「術」を指しており、母語によるコミュニケーションを通してすでに心得ているものである。

以上のことから、第二言語としての英語教育で用いられているストラテジーとは、効率よく目標を達成させるための「術」というように理解することができるであろう。最近の、第二言語習得の領域では、ストラテジーは、二つのタイプ、すなわち、学習ストラテジー (learning strategy) とコミュニケーション・ストラテジー (communication strategy) に分けられ、前者は、インプット (input)、すなわち、他からの情報を取り込むことに関係し、後者は、アウトプット (output)、すなわち、他に対して情報をどのように伝えるかに関係する。言い換えれば、学習ストラテジーは、学習者が情報の獲得、保持、修正、使用を促進するように、学習者によって採用される操作であり、これにより、学習がより容易に、速く、楽しく、自律的で、効果的なものとなり、そして、新しい状況により一層転用可能なものとなる (Oxford, 1990:9)。一方、コミュニケーション・ストラテジーは、情報を創り出すコミュニケーション (the productive communication of information) のために言語的・非言語的メカニズム (verbal/non-verbal mechanism) を使うことに関わる (Brown 2000:123-7)。上述のCanaleの「ことばがうまく出てこない時 (または、知らない時) に、他のことばで言い換える」という “Strategic Competence” の例は、このコミュニケーション・ストラテジーの1つの例であるということが出来る。すなわち、コミュニケーションを成功させるために、話し手は、「言い換える」というストラテジーを内在化し、必要に応じて使っているということが出来る。そして、このようなストラテジーは、教えることが可能であり、これらのストラテジーを教えることは、学習者の自律 (learner autonomy) を目指す指導を視野に入れているものであるということを指摘しておきたい。

今回のリーディング指導の「実践授業」では、他の人からのメッセージ (書かれたメッセージ) をいかに効率的に取り入れるかを指導することを目指すもので、学習ストラテジーに属する。特に、比較的長い文章の中から、必要な情報をできるだけ速く読み取ることが

できることを目標にしたものである。そのために、教師が配慮すべきことは、まず、第一に、教材が学習者にとって興味あるものを選ぶこと、そして、難しい単語・複雑な文法構造が多く含まれている骨の折れる教材を避けること、第二に、辞書に依存しないように注意すること、第三に、文字どおりの意味だけではなく、言外の意味を読み取る能力を伸ばさせることである (Seliger, 1977: 62-3)。

これらのことを踏まえたうえで、大事な（または、必要な）情報の捉え方を指導することになる。従来の訳読中心の指導が、「ボトムアップ (bottom-up)」であったのに対し、ここでは、全体を見ながら、大事な情報を探す「トップダウン (top-down)」の視点を指導する。ジグソー・リーディングの指導は、その視点を学習者に気づかせるものである。さらに、ここで用いられるもう一つの方法は、書かれた内容に従って質問を用意するというものである。学習者は、質問を手がかりに、その答えを見つける作業を通して、大事な情報を取ることに馴染んでいくことになる。この場合、質問は、こまごましたものではなく、全体の要点が見えるように配慮されている。これは、一般に、“directed reading” と呼ばれる技法でもある。

II. 実践授業報告

2.1. 授業の目標と方法

『中学校学習指導要領（平成10年12月）』には、具体的目標の一つに「英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。」が掲げられ、また、その内容として、次の四つがあげられている。

- (ア) 文字や符号を識別し、正しく読むこと。
- (イ) 書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること。
- (ウ) 物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読み取ること。
- (エ) 伝言や手紙などから書き手の意向を理解し、適切に応じること。

今回の実践授業においては、とりわけ (ウ) に焦点を当てた指導を試みることにした。『英文読解のプロセスと指導』、『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』などの文献を読み、指導の目標を「プロセス」を大切にしながら、一語一語を訳していく「訳読」から『指導要領』も求めている「読解」へと導くという点に設定した。

具体的な指導方法として、与えられた3コマの授業を次の二つに分けることにした。

- (1) Jigsaw Readingを用いた「英語のパラグラフ構造」および「英語の論理」の理解をはかる指導 (1コマ)
- (2) (1)に基づいて、実際に「読解」という行為を体験させる指導 (2コマ)

2.2.1. Jigsaw Reading

まず, Jigsaw Reading (以下JRとする) について de Berkely-Wykes (1993) を参考にしながら, 簡単にまとめておこう。

JRは, 自己完結したテキストを断片に分割し, それを生徒に適切な順序に復元させるといういたって単純な方法をとる。しかし, 「復元する」という活動に従事している間, 生徒は, 断片の中に含まれる「接続詞」などの要素を手がかりにしたり, あるいは自らが持つ知識や経験を頼りに予測や推測をしたりする。つまり, トップダウンとボトムアップの二つの処理を同時に行なうというきわめて有効性の高い手法である。

2.2.2. JRの実践

12月9日(月) 2校時

第3学年4組 男子19名 女子20名

JRのためには, ワールドカップが日韓で共催されたこともあったので, Oxford University Pressが刊行しているOxford BookwormシリーズからSoccer (700語水準) を選んだ。Footballの種類とルールを述べた “What kind of football?” の部分を取り上げた。はじめに全文を引用しておく。

In different parts of the world, people play different kinds of football.

In some countries, people play Rugby football. In France and Britain, both Rugby and Soccer are played. Rugby football is played with a different ball. Players can kick the ball with their feet and use their hands to pass the ball to another player.

In the USA, a lot of people play and watch American football. The players wear different clothes. As in rugby, American football players can pass the ball with their hands.

But in most of the world football means soccer. The name ‘soccer’ comes from the official English name for the game: Association Football. One hundred years ago, some English students took the ‘SOC’ in ‘Association Football’ and started calling this new game soccer.

Soccer is easy to understand. There are only seventeen rules. It is played with a round ball on a soccer field or pitch. Each team has eleven men or women on the field: if a player is hurt and has to leave the field, another player—a substitute—can take his or her place.

A game lasts for ninety minutes. At half time the players have a rest for fifteen minutes and when the game starts again, the teams change ends.

Each team tries to score goals. The team with the most goals after ninety minutes is the winner, the other team is the loser. Teams do not usually score more than three or four goals in one match. If both teams get the same number of goals, or if neither team scores, the game is a tie. In some competitions if the game ends as a tie there is extra time, and then penalty kicks are used to find the winner.

この文章の第1パラグラフのみを黒板に掲示し, 残りの6パラグラフをあらかじめ分け

てもらった12のグループに次のような形で手渡した。ここでは第2パラグラフのみを具体例として挙げておくことにする。

In some countries ,

people play Rugby football .

In France and Britain ,

both Rugby and Soccer are played .

Rugby football is played

with a different ball .

Players can kick the ball

with their feet

and use their hands

to pass the ball to another player .

このパラグラフの場合は、10枚の紙が手渡されることになる。グループの成員で話し合いながら、順番を考え、決まったところで、紙の裏に貼付してある両面テープをはがし、画用紙に貼りつけさせた。

その後、各グループの代表者に読んでもらい、正答をクラス全員が見えるように黒板に掲示した。すべてのグループが出揃ったところで、今度は全員でパラグラフ間の並びかえをさせた。

授業の手順をもう一度整理しておこう。

- ①クラスを12のグループに分け、各グループに1パラグラフずつ割り当て、グループの成員の間で話し合いながら並びかえをさせる。
- ②各グループの代表者を指名し、音読させ、答えを比べる。
- ③黒板に正答を掲示し確認させる。
- ④すべてグループの正答が出揃ったところで、各パラグラフ間の順序をクラス全体で考えさせる。
- ⑤最後に解答となる原文を配布し、確認させる。
- ⑥1文ずつのコーラス・リーディングを行なうことで授業をまとめる。

パラグラフによっては難易の差があり、苦勞をしたグループもあったが、どのグループも真剣にまた楽しそうに活動に取り組んでいた。また、掲示した正答と異なっていた場合も、特に指示したわけではないが、誤りを自分たちで訂正していた。パラグラフ間の並びかえの際も活発な反応があった。途中、グループの間を回りながら、英語の文章の構成は「一般」から「具体」へと進むということをヒントとして与えた。

2.3. Reading Activity

読解指導を行なう場合、使用するテキストは「物語文」と「説明文」の2種類に大きく分けられる。ただし、「説明文」が「物語文」の形式をとる場合もある（このことについて詳しくは宮浦（2002）を参照のこと）。

大坪・塚崎・辻山（2000）が「物語文」を用いた指導事例を報告していたので、今回はあえて「説明文」を用いることとした。教材は、JRと同様にOxford Bookwormsから選んだ。教材の選定にあたって考慮したことは（1）中学生の知的興味をひく内容であること、（2）中学生の英語力でも無理のない英文で書かれていることの2点である。

最終的には、*Australia and New Zealand*（1,000語水準）からNew Zealandの部分を選んだ。ニュージーランドという国がオーストラリアの影に隠れて未知の部分が多いことに加え、附属中学校のALTがニュージーランド人であることからこの教材に決めた。時間的制約から全文を読むのは不可能なので、最初の四つのセクション（1. New Zealand, 2. The land, 3. The past, 4. The Maori people）を取り出してテキストを作成した。当初は、1パラグラフを黙読させ、内容に関して、英語で口頭質問することを考えていたが、生徒の授業態度を事前に観察するうち、書かせることをさせないと注意力が散漫になることに気づいた。そこで、テキストの右側のページに内容を読み取る指針となる設問を用意した。作成したテキストはAPPENDIXに収録しておく。

12月10日（火）1校時

第3学年4組 男子19名 女子20名

読解に入る前に黒板にオーストラリアの地図を貼り、生徒を一人指名し、ニュージーランドを書いた紙を黒板に貼らせてその位置を確認した。それからニュージーランドについて知っていることをあげさせた。南半球にある島国であること、キウイフルーツ、飛べない鳥キウイなどの反応があった。

テキストを配布した後、前日に学習した英文のパラグラフ構造などを喚起させるように注意を払いながら、1パラグラフを読ませては設問に答えさせた。正答を確認した後、内容をさらにふくらませる問いを日本語で行ないながら授業をすすめた。また、適宜、ニュージーランドに関する写真などを黒板に掲示し、語や文章の理解を助けた。

12月13日（金）2校時

第3学年4組 男子19名 女子20名

前時は「3. The Past」の第1パラグラフで終わっていた。その中にboth islandsという表現があったので英語でその名前をたずね、復習を行なった。また、マオリ族がNorth Island

へ移住した理由を、本文には書かれていないが、日本語でたずね、考えさせた。気候や環境のため、といったよい反応が返ってきた。

前時と同様の手法で授業を進めた。具体的な例を少し挙げておく。

In 1642 the Dutch sailor Abel Tasman visited New Zealand and gave it its name; Zeeland ('Sea land') is a part of Holland. Captain James Cook visited the islands four times between 1769 and 1777, sailed all the way round them and made the first map of the country. In 1840 some British and some Maori people met and agreed that New Zealand now belonged to Britain. But when more and more British people came to live in New Zealand, fighting about the land began between the Maori and the British. The fighting finally ended in about 1870.

上記の英文に対して、次のような問いを用意して各自に記入させた。

12. What does the Dutch word Zeeland mean?

It means ().

13. Who made the first map of the country?

() did.

14. What began between the Maori and the British?

() began.

一つの問いに対して一人の生徒を指名し、答えの確認をした。その後、「本文中に1777年という年号が出てきますが、それは日本では何時代にあたりますか」あるいは「そのころ、ヨーロッパで起こった重大な出来事は何ですか」さらに「本文中の1840年には何が起きましたか」といった問いを日本語で発した。最後の問いの答えは「アヘン戦争」である(生徒は即答した)が、アヘン戦争とヨーロッパ人のニュージーランド発見がけっして無縁でないことを指摘した。このような問答(インタラクション)を行なうことにより、生徒が知識として持っているものを引き出し(トップダウン的な読み)、テキストに書かれてあることをよりリアルに感じさせ、読みを深め、さらに、興味を持って読み進めるといった態度の育成に努めた。⁽²⁾

全部で5,000語ほどあったので最後まで読みきることができず、パラグラフが一つ残ってしまった。時間内にアンケートを実施することもできなかったので、担任の先生にお願いした。次節ではアンケートと集計結果を示し、その分析を試みてみたい。

2.4. 「英語に関するアンケート」の集計結果とその分析

2.4.1. アンケートとその集計結果

*以下において、数字は実人数を表し、総数は37名である。

1. 「英語」という教科は好きですか？

はい	12
いいえ	10
どちらとも言えない	15

2. 「英語」という言語は好きですか？

はい	19
いいえ	5
どちらとも言えない	13

3. 英語の文章を読んでいてどんな時に難しいと感じますか？(複数回答可)

ア 意味がわからない単語がある時	30
イ 文法がわからない時	21
ウ 文章が長い時	17
エ 日本語に訳す時	11
オ 読めない単語がある時	21
カ いつでも	5
キ 熟語がある時	12
ク 同じ単語にいろいろな使い方がある時	19
ケ 文化の違いを感じる時	7
コ 字が小さい時	7
その他 やる気がないとき	
特になし	
途中で意味がわからなくなったとき	

4. 3回の授業のうちどれが面白かったですか？ (1名複数回答)

・ジグソー (サッカーの話) をやった時	19
・ニュージーランドの話	18
・つまらなかった	1

5. 授業を受けてみて長い英語の文章を読むコツがつかめましたか？

はい	23
いいえ	3
どちらとも言えない	11

6. 授業について感じたことがあったら何でも書いてください。(代表的なものだけ掲載)

- ・先生のテンションの高さについていけずに（笑）けど、本当に授業は楽しかったです。英語を好きにはなれなかったけど、英語は楽しいなあと思いました。
- ・ニュージーランドの歴史とか、サッカーの話とかとてもおもしろかったです。明るく、楽しい授業でした。
- ・すごく工夫された授業だと心底思いました。先生が楽しませてくれたので、こちらも楽しく授業を受けることができました。「英語を歴史と組み合わせる」というのは歴史好きの僕にとってはたまらなかったです。最高です。
- ・授業はおもしろい方だったと思うけど授業として取りあつかうならニュージーランドの話には本文訳があった方がよい理解ができたと思う。
- ・長文読解について、少しコツが分かったような気がします。
- ・リーディングは自分の中でとても好きなのでとても楽しかった。ニュージーランドの読み取りは分からない単語があって苦労した
- ・時にはこういった授業もした方が自分の欠点がわかったりして役に立つ。
- ・とても楽しく学ぶことができました。また、サッカーの歴史とか英語を通して学べてよかったと思う
- ・ニュージーランドの歴史とか、今まで知らなかったことが分かって嬉しかったです。それに、右側にあった問題も、穴埋め問題とか、考える問題とか、いろいろあって、たのしかったし、問題が解けたとき、うれしかったです。
- ・もっと英語が上手になればなあと思いました。難しいと思いました。
- ・はなしが上手かったです。（おもしろかったです）文が知らないことだったので、知れてよかったです。

2.4.2. 集計結果の分析

アンケートの設問順に検討していくことにする。最初の二つの設問に対する答えから英語という「言語」は好きなのだが、英語という「教科」は嫌いであるという傾向が少なからず認められる。この問題については天満（1982）が詳細な検討を加えているが、英語を教えるものとして心しておかなければならない事実である。

3の設問は、大坪・塚崎・辻山（2000）の中で示されているものと同じである。ほぼ同様に、未知の単語に対して不安を感じている生徒が多いことがはっきりと読み取れる。また、6の自由回答に対しても2名の生徒が「授業として取りあつかうならニュージーランドの話には本文訳があった方がよい理解ができたと思う」「ニュージーランドの読み取りは分からない単語があって苦労した」と書いている。生徒の中にはいまだ英文のすべての単語が既知のものであって欲しい、また英文を100%日本語に移し変えることこそが英語を読むことである、という意識があることがわかる。

「語彙 (vocabulary)」およびその指導は別に論ずべき大きな問題である。例えば、「語の意味を理解する」と簡単に言うが、実際にはそれが何を意味するのか定義することすら難しい。つまり、「意味」には少なくとも「指示的意味(denotation)」と「言外の意味(connotation)」の二つが存在するからである。また、教室場面という限られた環境を考えてみても、生徒一人ひとりの習熟度や意欲も異なっている。が、「語彙指導」は「読解指導」

と表裏一体をなしているのどちらか一方が欠けても十分な英語学習は成立しない。

冒頭に掲げた「英語という「言語」は好きであるが、英語という「教科」は好きではない」と答えた生徒が多かったことに戻ると、授業中の「生徒の戸惑い」を感じ取ることができる。学習方法のみならず教室場面での自己のふるまいも含めて「どうしたらよいかわからない」状態に置かれた生徒が多いことを教師はもっと認識し、「術」としての「学習ストラテジー」を生徒に伝えてゆくべきであろう。また、「学習者の自律」の度合いが高まっていけば、教室を離れた場面においても英語を学ぼうとする姿勢が養われてゆくものと期待される。「言語学習」ないし「言語習得」というのは受動的な態度だけでは不可能である。「教えてもらう」から「自ら学ぶ」への態度の変容が不可欠なのである。教える側にとって最も大切なことは「生徒」がどのような気持ちで学習に取り組んでいるのかをできるだけ正確に把握することである。

分析をしていると否定的な部分ばかりに目がゆくが、「楽しい」という肯定的な印象を多くの生徒がもってくれたこと、また、「時にはこういった授業もした方が自分の欠点かわかったりして役に立つ」などの感想があったことも事実である。したがって、今回の「実践授業」は最終的に目指すべき「学習者の自律」への少なくとも足がかりは得られたという意味において評価できるものであったとも考えている。

Ⅲ. まとめ

以上、学習者が自ら、大事な（または、必要な）情報をできるだけ速く読み取ることを目指した指導の例を示したことになる。通常の授業では「ボトムアップ」中心の指導がなされており、ときおり、このような「トップダウン」の指導を取り入れることにより、学習者に「ボトムアップ」と「トップダウン」の両方の読み方を自由に駆使して、情報を取る「術」を学習させることができることになる。このような読み方は、日本語で書かれたものを読む場合には、すでに行なっている「術」であり、その方法が英文読解にも用いられることに気づかせているにすぎないのかもしれない。しかしながら、生徒の反応、「長文読解について、少しコツが分かったような気がします。」「時には、こういった授業もした方が自分の欠点分かったりして役に立つ。」等が見られることから、やはり、生徒達にとっては英文読解の新しいストラテジーを学習したことになるといってよいであろう。

リーディング指導においては、学習者にどのような読み方をすればよいのかを指導することは教師の最も重要な仕事の一つである。次に示すSeligerのことばはこれを裏付けるものであろう。

The way a student reads a printed text in the new language and the speed with which he reads is often the result of the way he has been taught to read. (Seliger, 1977:58)

学習者は、新しい言語（英語）の読み方のストラテジーを獲得することにより、読むことが、より容易で、速く、楽しく、自律的で、効果的なものとなり、「学習者の自律」が促されることになる。ここで示されたリーディング指導の実践例は、“Strategies-based Instruction” (Brown, 2000:130-4) の一つの例を示していることになる。

注

- (1) 多読の重要性は、小西友七(1962)によってすでに指摘されていた。
 (2) 生徒の反応があまりによかったので、担任の先生に伺ったところ、附属中学校では「考える歴史」というものが実践されているそうである。その成果を目の当たりにして、こちらもいささか驚いた。

* 実践授業に際し、附属中学校の大屋茂生教官にご協力いただいた。ここに記して謝意を表わしたい。

参 考 文 献

- Brown, H. D. (2000) *Principles of Language Learning and Teaching* Longman.
- Canale, M. (1980) "Atheoretical framework for communicative competence" (Unpublished paper)
- Canale, M. (1983) "From communicative competence to communicative language pedagogy" In Jack C. Richard & Richard W. Schmidt (eds.) *Language and Communication*. Longman.
- de Berkeley-Wykes (1993) 'Jigsaw Reading' In Oller, Jr., J. W. (ed.) *Method That Work* Heinle & Heinle Publications.
- Hsiao, T. H. and Oxford, R. L. (2002) "Comparing Theories of Language Learning Strategies: A Confirmatory Factor Analysis" *The Modern Language Journal* 86, 368-383.
- Knapp, D. (1980) "Developing Reading Comprehension Skills," in *Readings on English as a Second Language*, Croft, K. (ed.) pp. 347-354. Winthrop Publisher.
- Oxford, R. L. (1990) *Language learning strategies: What every student should know*. Heinle.
- Seliger, H. W. (1972) "Improving Reading Speed and Comprehension in English as a Second Language," in *Teaching English as a Foreign Language: A Book of Reading*, Kitaichi, Y., K. Funatsu, R. Iwaki & K. Namita (eds.), pp. 58-66. The EICHOSHA LTD.
- SLA研究会 (編) (1974) 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店。
- 大坪喜子・塚崎香織・辻山啓子 (2000) 「中学生のためのリーディング指導」『長崎大学教育学部紀要 教科教育学 No.35』長崎大学。
- 小西正恵(2002)「ストラテジー」In 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ (編) pp.208-228.
- 小西友七(1962)「英語教育における多読訓練の必要」In 小西友七(1997)『英語への旅路』pp.449-452. 大修館書店。
- 高梨庸雄・卯城祐司 (編) (2000) 『英語リーディング事典』研究社。
- 谷口賢一郎 (1998) 『英語教育改善へのフィロソフィー』大修館書店。
- 津田塾大学言語文化研究所読解グループ (編) (1992) 『学習者中心の英語読解指導』大修館書店。
 (2002) 『英文読解のプロセスと指導』大修館書店。
- 天満美智子 (1982) 『子どもが英語につまずくとき』研究社出版。
 (1989) 『英文読解のストラテジー』大修館書店。
 (1994) 『新しい英文読解法』(岩波ジュニア新書) 岩波書店。
- 宮浦国江 (2002) 「テキスト・タイプ」In 津田塾大学言語文化研究所読解グループ (編) pp.118-136.

[APPENDIX]

1. New Zealand

What kind of country is New Zealand? First, it is a long way from everywhere—three hours by plane from Australia, and about twenty-six hours by plane from London. It is a country of islands; the North Island and the South Island are the main ones, and there are many smaller ones.

It is a long, narrow country; nowhere in New Zealand is more than 125 kilometres from the sea. It is a little larger than Great Britain, but Great Britain has a population of 57 million, and New Zealand has just 3.4 million people. It is an exciting and surprising land; as well as mountains, forests, lakes, deserts and rivers, there are places where hot water and steam explode out of the ground.

And it is a young country. The first Maori people landed there about a thousand years ago, and the first British people came to live there around 1840. The oldest tree in New Zealand is more than 1,200 years, but you will not find many buildings that are more than about 150 years old. And in New Zealand today more than half the people are under thirty years old.

1 .How long does it take to go from London to New Zealand?

It takes ().

2 .There are two main islands in New Zealand. What are they called?

They are called () and ().

3 .How many people live in New Zealand?

() do.

4 .Is New Zealand an old country?

().

5 .How old are more than half the people in New Zealand today?

They are ().

2. The land

If you travel from the top of the North Island to the bottom of the South Island you will see a lot of different kinds of country. In the north it is warm enough to grow oranges. In the centre of the North Island is a group of three high volcanoes, Ruapehu (2,797 metres) Ngauruhoe and Tongariro; sometimes you can see steam and smoke coming from them. The North Island's main rivers, the Waikato, Wanganui, Rangitikei and Rangitaiki, all begin near the centre of the island; water from the river Waikato, which is 425 kilometres long, makes electricity for New Zealand.

In the South Island the mountains called the Southern Alps go almost from one end of the island to the other. Near the centre is New Zealand's highest mountain, Mount Cook, which is 3,764 metres high. There are many lakes and rivers here too, and it is a very popular place for sport-skiing in the winter, and water sports in the summer. East of the mountains are the Canterbury Plains—wide flat land used mainly for farming.

4. The Maori people

The Maori have lived in New Zealand for more than a thousand years. When Captain Cook and his men landed here, they found a tall, strong people with brown skin and black hair. The Maori of those times lived in wooden houses and had wooden boats, and they often cut beautiful shapes into the wood which they worked with. They caught birds and fish and grew sweet potatoes for food. They were also excellent singers and dancers. At this time the Maori population was between 100,000 and 150,000.

When the British came it was, in some ways, not a good thing for the Maori. Many people, both Maori and Pakeha (the Maori name for white people) died in the battles over land. People still argue today about the land and who owns it, and many people feel very strongly about it. The Pakeha also brought guns, strong drinks and cigarettes with them, and diseases which were new to the Maori. All of these things brought terrible trouble to the Maori, and many of them died. By 1900 the future seemed hopeless, but after a while the population slowly began to grow again.

In the twentieth century many Maori began to live more like the Pakeha. Some became successful New Zealanders, like Sir Apirana Ngata, who studied the stories and songs of his people. But there was a price for this success; Maori children had to speak English not Maori, at school, and many Maori families left their old homes and moved to the cities. The old Maori way of life was dying, and the Maori language was dying with it.

But in the 1960s and 1970s many Maori, especially young ones, began to think seriously about the future. They began to learn the Maori language, and to learn more about the Maori way of life. When the South Africans refused to let Maori play football in their country, many New Zealanders—Maori and Pakeha—became angry. People were realizing that the Maori were an important part of New Zealand, and things began to change. Now Maori is taught in schools, and most young people learn it.

Today there are about 400,000 Maori people in New Zealand—that is about twelve per cent of the population. Maori is an official language, like English. Some Maori are internationally famous in sport or music, like the singer Dame Kiri Te Kanawa. Although the Maori nearly disappeared a hundred years ago, today their voice is becoming stronger again. Maori and Pakeha will make New Zealand's future together.

17. How were the Maori when Captain Cook and his men landed?

They were ().

18. What did the Maori do for food?

They () and ().

19. What is the Maori name for white people?

It is ().

20. What did Pakeha bring to New Zealand?

They brought ().

21. What did Sir Apirana Ngata do?

He ().

22.What happened after his success?

().

23.What did many Maori begin to do in the 1960s and 1970s?

They began to ().

24.Who refused to let Maori play football in their country?

() did.

25.Is the Maori language taught in school?

().

26.How many Maori people are there in New Zealand today?

There are ().

27.What is the name of an internationally famous Maori singer?

It is ().